第2篇　貨幣の資本への転化

第4章　貨幣の資本への転化

第2節　一般的定式の諸矛盾

〔浜林　「資本論」を読む、ｐ.210～〕

（商品流通からはもうけは生じない）

　　　　　　　商品の流通と貨幣の流通とどこが

違うのか。単に順序を入れ替えただ

けのように見える。順番を入れ替え

ると、どうして金がもうかるのか。

資本論ｐ.272　どのようにして、これらの過程の本性を魔術的に変えてしまうのであ

ろうか。

　結論を先取りすると、流通過程すなわち物の売り買いでは、もうからないということである。

ｐ.273　むしろわれわれは、単純な商品流通が、その本性上、この流通にはいり込む価値の増殖、したがって剰余価値の形成を許すかどうかを、見極めなければならない。

（両方が得をする）

　　　　　　単純な商品流通とは、商品から始

まって商品に終わる。最初の商品と

後の商品は違う。すなわち、使用価値

が変わるということである。

ｐ.273　使用価値が問題になる限りでは、明らかに両方の交換者が得をすることができる。

両方とももうかる。使用価値だから、自分が欲しいもの、酒を飲みたい人は酒、本を読みたい人は本と交換するのだから、両方とももうかる、両方とも必要としなければ交換は成立しない。成立は両方とももうかるということになる。

今度は、穀物とワインを例にとって

ｐ.274　「交換は両方の側が得をする取引である」

　　　　　両方とも得をするという話は、使用価

値についてであり、ここからは交換価値の考察である。

（価値は変わらない）

品物の種類は変わるが、品物の価値

は変わらないことが展開される。種類

が変わることを形態転換、商品の変態

－すなわち形が変わると表現されてい

る。しかし、価値の大きさの変化は少し

も含まない。価値の変化は貨幣という

形をとるだけである。最初に売られた

商品の価格として、それから最後に変

われた商品の価格として現れる。お札

と金貨を取り替えもと同じように形が

変わるということである。

　　　　　　等価物どうしの交換、商品の形がか

わるだけで価値は同じ。したがって使

用価値に関しては、両方が得をするが、

交換価値は両方とも得をしていない。

ｐ.276　この背離は、商品交換の法則の侵害として現れる。

　資本主義の通常のかたちの場合は価値からはなれた価格での売買は長続きしない。一時的には可能だが、やがておさまる。

ｐ.276　等価物どうしの交換であり、したがって価値を増やす手段ではない。

（使用価値と交換価値の混同）

商品流通を剰余価値の源泉として考

えようという人たちは、「たいてい、

一つの〝見当違い〟」－使用価値と

交換価値を混同する。

ｐ.276　「商品交換では等しい価値が等しい価値と交換されるというのは誤りである。2人の契約当事者はどちらも、つねにより大きな価値と引き換えにより小さい価値を与える。」

交換価値についても両方とももうか

っている－コンディヤックがいう。

　 商品生産が十分発達していない社会、

自給自足が原則の社会の話ではなく、

商品生産が十分発達した社会であるか

ら、あくまで等価交換で考えると言っ

ている。

　商業は生産行為－「商業は生産物に

価値を付け加える」

買い手にとっても生産行為になるの

か‥。

ｐ.278　もし、交換価値の等しい商品どうしが、または交換価値の等しい商品と貨幣が、したがって等価物どうしが交換されるならば、明らかにだれも、自分が流通に投じるよりも多くの価値を流通から引き出すことはない。その場合には剰余価値の形成は行われない。

価値の同じものと価値の同じものを

取り替えるのだから、どちらももうか

らない。当然のこと。

商業は等価交換であるから、そこで

はもうけは生じない。ここが基本であ

る。そうは言うものの、諸ケースを考え

てみる。

p.279　それゆえわれわれは、非等価物の間の交換を想定してみよう。

（不等価交換でもうけは生ずるか）

p.279　いま、なんらかの説明のつかない特権によって、売り手が商品をその価値よりも高く売ること、その価値が100なのに110で、つまり10％の名目的な価格引き上をしてことが…

売り手は10の剰余価値をえる。買占

めでは起きる。

p.279　しかし、かれは売り手であった後では買い手になる。いまや第3者の商品所有者が売り手として彼に出会い、この売り手もまた商品を10% 高く売る特権を10 享受する。さきの男は、売り手としては10だけ得をしたが、買い手としてはだけ10だけ損をする。

それぞれ、10％高く売りあうとプラマイゼロ。もうけはなくなるといっている。

売るだけで買わなければ、永久にその人だけもうかるが、商品生産社会では売るだけはありえない。

「逆にわれわれは」として買うほうが、価値以下で買うとしても、買う元手がなくなってしまう。

p.280　剰余価値の形成、したがってまた貨幣の資本への転化は…

　不等価交換では説明できない。一時的にあってもずっと続くことはできない。

（生産者は消費者）

p.281　相対しているのは、生産者と生産者である。

生産者と消費者という対立は、売り手と買い手となって現れる。売り手は買い手、買い手は売り手だとなる。

不等価交換でもうけが出ると考える場合には

p.282　生産することなしに消費するだけの一階級を想定するのである。

あるいは逆でもよい。国民経済全体として見れば、プラマイはない。

p.284　したがって、どんなにぬらりくらりいい抜けてみたところで、結果はやはり同じである。

つまり

p.284　等価物どうしが交換されても、剰余価値は生じないし、非等価物どうしが交換されてもやはり剰余価値は生じない。流通または商品交換にはなにも価値は創造しない。

以下は、〔p.284の結論〕を補っている。

（「大洪水以前」の資本）

「大洪水以前」：近代以前という意味。シルクロードというレベルの商品取引のもうけ。いわば「前期的資本」はここでは考えないといっている。

（近代の商業資本と利子生み資本）

ｐ.285　本来の商業資本は、‥‥

　「大洪水以後」のこと。中心は産業資本で、生産過程から利潤、剰余価値を引き出していくものが基本である。そして産業資本が自分でつくった品物を、直接消費者に届ける代わりに、それを誰か他の人に、やってもらうことがある。部分を担っているのが、商業資本である。

　「産直」は商業資本がいらない。

産業資本の仕事の一部を肩代わりしている。産業資本の利潤のおこぼれにあずかっている。生産過程の剰余価値の一部を、手数料として商業資本に支払っている。

　トヨタの工場前で売れれば、商業資本はいらない。

　利子生み資本は、主として銀行である。銀行が金を貸すのは、産業資本の足りないところの手伝いである。銀行の手伝いにたいして産業資本はもうけの一部でお返しする。→利子である。

ｐ.289　われわれは研究が進むにつれて、商業資本と同じく利子生み資本もまた、派生的形態として見いだされるであろう。

　派生的形態：産業資本のお手伝い。補助的。

（もうけは流通から生ずる）

ｐ.288　すでに明らかにしたように、剰余価値は、流通のなかでからは生じえないのであり、‥‥。

　剰余価値は流通からは生じない－これが基本で、まず重要である。

　それではどこから－流通以外からは生じ得ない。つまり、商品の売買という中から、やっぱり生じてくりといっている。

　貨幣で、Ｇ－Ｗ－Ｇ´だが、一度商品を買って、それを売ってもうけるという中で出てくる。

ｐ.289　資本は、流通から発生するわけにはいかないし、同じく、流通から発生しないわけにもいかない。資本は流通のなかで発生しなければならないと同時に、流通のなかで発生してはならないのである。

タイトルの「一般的定式の矛盾」とはこのことである。「こうして二重の結果が生じた」

等価交換が大前提であって、価値どおり買って、価値どおり売る。しかし、その最後、過程の終わりには、より多くのかちをひきださなければならない。この矛盾をどう解決するのか。

ｐ.289　これが問題の条件である。〝ここがロドス島だ、ここで飛べ！〟

資本家の言い訳にたいして、「ちゃんと答えろ」といっている。

〔第2節　一般的定式の矛盾の「超約『資本論』的場読解　p.114〕

等価交換の原則を守らない貨幣の謎

商品生産社会の原理は、量的に同じ等価交換が行われることを前提にしている。しかし、現実に貨幣と貨幣を等価交換するものは誰もいない。まことに奇妙である。

そもそも商品交換からして等価交換ではないのでないか。いつも安く買って高く売るが本質だ。いつも不等価交換だとマルクスの議論は吹っ飛ぶ。

Ｇ－Ｗ－ＧがＧ－Ｗ－Ｇ´は否定しようがない。Ｇ－Ｇ´

高利貸資本－お金を貸し付けて利子を受け取る。←貸し倒れの不安の慰謝料。

商業資本－遠隔地から珍しいものを買い、それを高く売りつける。←危険の代償。、

これらは、不等価交換が特殊な場合に起こることを意味しているにすぎない。

マルクスは、特別な例を最初から排除して議論を進める。

謎はどこから生まれるか

資本論本文ｐ.289　したがって、資本は、流通から発生するわけにはいかないし、同じく、流通から発生しないわけにもいかない。資本は流通のなかで発生しなければならないと同時に、流通のなかから発生してはならないのである。

普通の人の問題として考える。高利貸資本や商業資本の時代には流通から資本から生まれることがあった。しかし、商品生産社会の問題ではない。だがしかし、蓄積した資本が商品生産をしているのだから、生まれないともいえない。鶏と卵の話である。

資本主義のゲームは、公正なルール（等価交換）でなされながら、実は最初はそうでなかった。

理論的に解けないことを問題にしなければならないから、「本源的蓄積」の問題を最後に語っている。

資本論本文ｐ.289　貨幣の資本への転化は、商品交換に内在する諸法則にもとづいて展開されるべきであり、したがって等価物どうしの交換が出発点をなす。いまのところはまだ資本家の幼虫として現存するにすぎないわが貨幣所有者は、商品をその価値どおりに買い、その価値どおりに売り、しかもなお過程の終わりには、彼が投げ入れたよりも多くの価値を引き出さなければならない。彼の蝶への成長は、流通部面のなかで行われなければならず、しかも流通部面のなかで行われてはならない。これが問題の条件である。〝ここがロドス島だ、ここで飛べ！。

Hic　Rhodus　Hic　Salta―さあ、ここがロードスだと思えば、飛べるはずだ！